

(始良郡蒲生町大字漆字竹牟礼)

位置と環境

本遺跡は、町の中心部から北へ約10km離れた山間部にある、標高約165mの盆地内に位置している。付近には、縄文時代の楠ヶ字都遺跡、大嶺前遺跡、大原遺跡、広木遺跡をはじめ、戦国時代の山城跡など数多くの史跡・文化財が点在している。(第1図)

調査の経緯

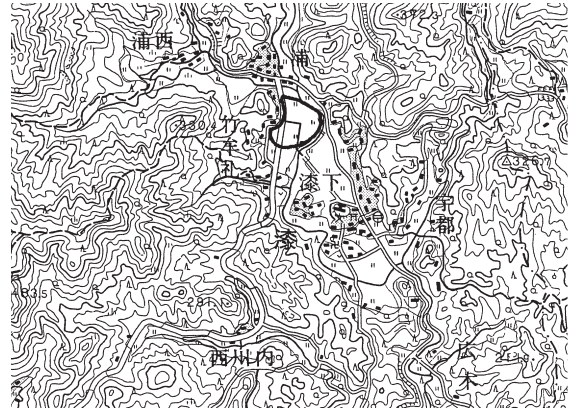
団体営土地改良総合整備事業の計画に伴い、平成2年に分布調査、平成3年に確認調査を実施した。

これらを経て、同事業区域内のうち、基幹道市町村道整備事業・県道代行路線(2,128m²)に係る部分については、平成4年に鹿児島県教育委員会が本調査を実施した。また、漆地区土地改良事業協同施行組合に係る部分(3,050m²)については、平成5年に蒲生町教育委員会が調査主体となって、県教育委員会の協力を得て本調査を実施した。

遺構と遺物

本遺跡内では、昭和24年に旧石器時代の槍先形尖頭器(長12.7cm×幅4.0cm×厚1.1cm)が採集されている。

平成4年の調査では、アカホヤ火山灰層から縄文時代早期の塞ノ神式土器(第2図1)、アカホヤ火山灰の二次堆積土層から縄文時代晩期の刻目突帯文土器・組織痕土器などの土器と石鏃・石匙・石錘・石槍・磨石・敲石・磨製石斧などの石器が出土した。また、上層面の黑色土層からは、歴史時代の掘立柱建物跡や古道跡などの遺構と土師器・墨書土器・刻



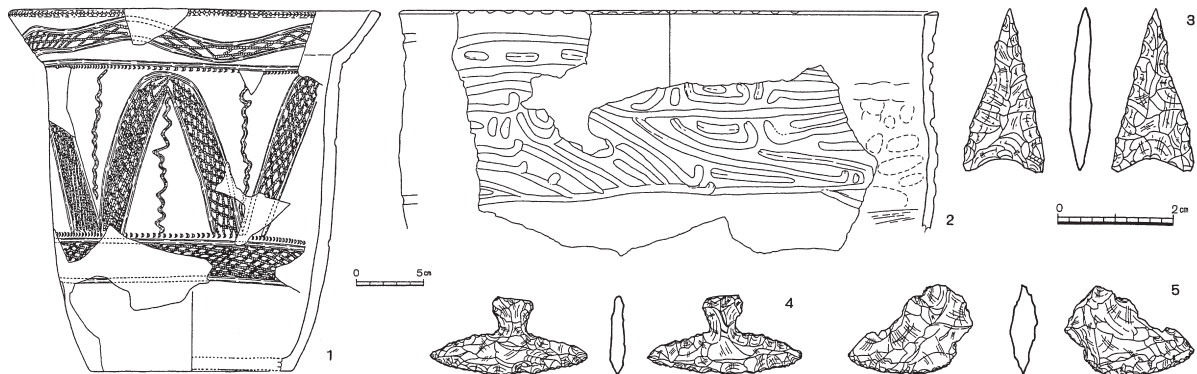
第1図 竹牟礼遺跡の位置

書土器・紡錘車・須恵器などの遺物が検出された。

平成5年の調査では、アカホヤ火山灰の二次堆積土層から縄文時代中期の阿高式土器(第2図2)が出土した他、石鏃(第2図3)・石匙(第2図4)・スクレイパー(第2図5)・磨製石斧などの石器が出土した。また、上層面の黑色土層からは土師器壺(第3図6)・坏(第3図7)・皿(第3図8)・小皿(第3図9)・土師甕(第3図12)や墨書土器(第3図10)・紡錘車(第3図11)・土錘(第3図13)・須恵器(第3図14)・焼塩壺、中世期の青磁器・白磁器・陶器などが混在して出土した。いずれも後世の耕作等による削平の影響を受けたためか、出土遺物は小破片が多く、完形に復元できるものはなかった。

また、残存状況がやや不良ながらも、歴史時代の掘立柱建物跡2棟、溝状遺構8条のほか、土坑・ピット・焼土などが検出された(第4図)。

1号掘立柱建物跡は、3間×2間の規模、柱穴は径25~38cm、深さ37~57cmである。2号掘立柱建物跡は、東側が1間半の規模で、柱穴は径39~59cm、



第2図 出土遺跡(1)

深さ28～42cmであるが、西側の桁部分と南北両側の梁部分は調査区域外にかかり未発掘のままである。いずれも、柱穴の埋土内から土師器や須恵器などが出土したが、柱痕跡は認められなかった。

溝状遺構1～3は、1号掘立柱建物跡付近の北側に、溝状遺構4は、同じく南西側に検出された。溝状遺構5～8は、2号掘立柱建物跡付近の東側及び南東側に検出された。

特徴

2か年にわたる調査結果から、縄文時代早期後半から断続的に遺跡が確認されることが判明した。ただし、縄文時代後期・弥生時代・古墳時代の遺跡については不明であった。遺物内容も豊富であるが、特に、縄文時代中期の阿高式土器、古代の焼塩壺が出土したことや、越州窯系青磁器、中世後期の李朝白磁などが輸入陶磁器であることから、より広域的な交流があったことも確認できた。

古代・中世の遺物が豊富であることは、かなりの有力者が存在していたことを伺わせるものである。この地は、今でも盆地の中に僅かな水田があるだけで、さらに、この水田地も中世頃までは居住地として利用されていたことから、当時の生活基盤が稲作であったことは考えがたい。この点は、今後の研究課題として残されたものである。

[特記事項] 本遺跡内に確認された泥炭層の堆積物を放射性炭素年代測定 (^{14}C 年代測定) により調査した結果、年代値は $9960 \pm 170\text{y. B.P}$ であり、縄文時代早期初頭期に、湿地の環境下で形成されたものであろうということが判明した。

資料の所在

出土遺物は、蒲生町教育委員会に保管されている。

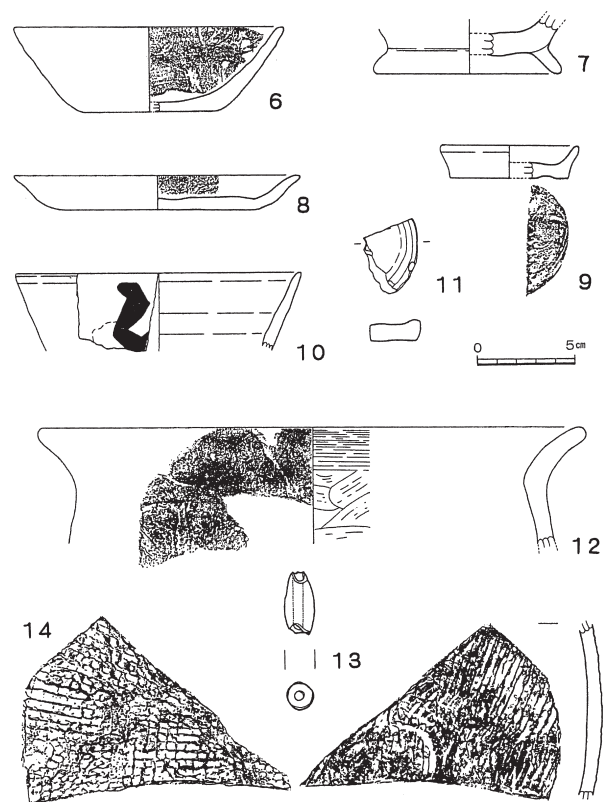
参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター1993「竹牟礼遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』

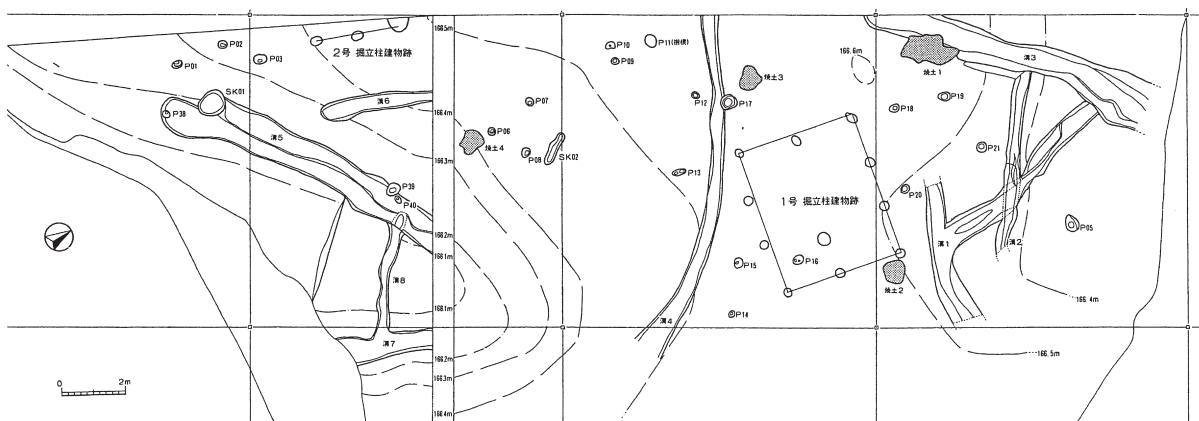
5

蒲生町教育委員会1995「竹牟礼遺跡」『蒲生町埋蔵文化財センター発掘調査報告書』3

(原田正己)



第3図 出土遺跡(2)



第4図 遺構配置図